『中国人と日本人―社会集団・行為様式と文化心理の比較研究―』

第二章　「族」中の中国人と日本人

尚　会鵬著
谷中信一訳

訳者序

本章は、日本と中国におけるそれぞれの家族――血縁関係が果たす社会的文化的役割についての比較考察である。日本と中国、いずれもその社会構造の基本をなしているのが家族である点では共通しているが、それが果たす社会文化的役割は全く異なることが論証されている。著者は、二（1）冒頭で、

これまで中国人宗族集団が日本人同族集団に比べて発達しており、また精巧にできていることを見てきた。中国人の宗族組織は彼らの世界観や行動様式にも深刻な影響を与えている。許烺光博士によれば、宗族は中国人にとって最も主要な二次集団である。多くの歴史学者は中国を「宗法社会」と呼ぶ。名前がどうであれ、この事実こそは、宗族制度が伝統的に中国社会の一大特色であることの反映なのだ。宗族制度がわからなければ、中国社会がわかるはずないし、中国人の文化心理もわかるはずがない。

と述べる。まさに氏のこの指摘のごとく、宗族制度は中国文化を知る上でのキー概念なのである。それゆえ、中国思想、中国文化、中国歴史といった学問諸分野に止まらず、現実の中国を相手にビジネスをしたり、現代中国の政治・経済政策を読み解くうえでも、十分な理解が望まれる概念に他ならない。しかも、尚氏はこれを日本の同族制度と比較しながらその特徴を明らかにしており、われわれにとって極めて理解しやすい組み立てになっている。

「家」と「族」は親族体系を構成する二大要素である。「族」は「家」を基礎に発展したもので、「家」の延長と言える。それゆえ、その特徴も「家」のそれと関連している。われわれは前章で日中家族制度の主な違いを検討してきたから、本章では「家」の延長としての「族」の分析に移ることにしよう。日本の同族組織と中国の宗族組織の違いは、両社会の

家族制度の違いと概ね一致している。このことは、家族制度の違いこそがまさしく族人組織の違いを形成していると言い換えることができる。家族制度の違いと族人組織の違いとが相まって、中国人と日本人はそれぞれ異なる親族体系を構成しているのだ。親族体系の違いは、個人の行動や心理にもそれぞれ異なった影響を及ぼしている。

中国人にとっての宗族集団は、日本人の同族集団に比べてはるかに重要である。そこで本章では中国人の宗族集団の分析により多くを費やすこととしよう。

一　族人集団の構造的特徴

（一）概念と名称

中国語の「宗族」という言葉は、実際は「宗」と「族」の二つの概念の組み合せである。古代中国人の宗と族に対する定義は、「宗とは、尊ぶなり、（宗を）先祖の主と為すは、宗人の尊ければなり」、「族とは、湊（あつまる）なり、為に恩愛の流湊（りゅうそう）するなり…生きて相親（あい）愛し、死して相哀痛するに、会聚の道有り。故に之を族と謂う」[1]というものであった。ここから、宗と族とには区別のあることがわかる。一般的に同宗と同族はいずれも同じ姓氏を名乗り、かつ共通の祖先（或いは仮想の祖先）を持つことを意味する。しかし、同宗の者は必ずしも一緒に暮らすわけではないから、それがある機能的な組織を作っているとは限らない。しかし、同族の者は一般的には共に暮らし、しかもより密接な関係を持っている。これがすなわち「湊」・「聚」（訳者注：いずれも「あつまる」の意）の意味である。ところが日本語にこの区別はない。日本語の「族」「同族」「同族集団」などの言葉は、唯一「家」（ie）と異なり、みな漢語の語彙であり、いずれも音読みしていることからもわかるように、日本固有の語彙には中国の宗族に相当する概念がない（過去にはあったが、後に用いられなくなったのかも知れない）。「同族」とか「同族集団」の語は、近代以降ようやく幾人かの研究者の著作の中に見えるようになる。実際の同族組織は「家（いえ）」の概念に含まれる。中国の語彙にはさらに宗族から枝分かれした集団に名付ける「房」「門」「家」などの呼び名が豊富にあり、ある地方では「柱」という呼び名もある。ただこれらは相対的な概念で、明確な基準があって分けられているのではない。中国人にとって、「族」とそこから枝分かれした集団である「房」や「門」などとの区別は、族同士の区別ほどには重要ではない。「房」・「門」・「柱」などは、時にひとつの家族を指すに過ぎないこともある。

例えば兄弟が分家したときなどで、もし兄弟三人とも結婚していれば、「三房」とか「三門」と言うことができる。また時にはひとつのとても大きな集団を指していうこともある。

また例えば、兄弟三人とも異なった土地に移住して数百年が経ち、それぞれ子孫が増えて数百人の集団になったときでも、ひとつの集団は他の集団に対して「門」と言うことができる。

日本語では、宗族の枝分かれした集団を言うのに本家と分家の二語があるのみだ（後述）。まさに呼び名の複雑さこそが人々の親族関係に対する重視の度合いを示しており、宗族集団に対する細かな区別のないことが、日本人の宗族集団が中国ほどには発達しておらず、宗族組織が個人に与える影響も中国ほど重要ではないことを示している。

更に、中国人が「族」という言葉を単独で用いるときは、同一祖先にたどることができ、かつ同一地域に居住している人たちを指していることも指摘しておくべきだろう。ところが、日本語ではこの言葉は単独で

使われることはなく、他の語と結びついてある熟語を作るときに用いられるようである。中国語であれ、日本語であれ、「族」の字と結びついた語彙はたくさんあるが、よくよく見れば分かるように、中国語におけるこうした語彙はたいていみな血縁関係を表わすものばかりである。例えば、「族衆」「族類」「族人」「水族」「語族」など。しかし日本語では、「族」という漢字は熟語として使われる方がずっと多いものの、血縁関係を指すとは限らない。日本人はある共通の特色を持った人々に「～族」という言い方をする。例えば「ながらnagara族」（テレビを見ながら宿題をする子供たちを指していう）、「窓際族」（会社で「閑職」に置かれている管理職のことで、彼らはたいてい部屋の隅の窓際に事務机が置かれている）、「暴走族」（速度違反して車を走らす若者たち）などである。中国でもここ数年来、香港や台湾はその影響を受けて、「上班族」「有車族」といった言い方が現れたが、しかし普通は「工薪階層」「有車階層」という言い方の方をずっと好ましく思っているようだ。このことは、日本人が「族」という言葉をかなり気ままに用いていることを示している。

西洋の研究者は、氏族（clan）について、同一地区に居住し同一姓氏を用いている男性はみな同一のclanに属していると定義する。しかし、上述した中国人の「族」と「宗」の区別に従えば、「同宗」は必ずしも「同族」ではない。このため、中国語の「宗族」は、英語の「clan」と全くイコールなわけではなく、「clan」よりさらに発達した精巧な社会組織である。

中国人の「族人集団」の規模は結局のところどれほどであろうか。一般的には、族の範囲は高祖から玄孫までの九世代と考えられている。すなわち、高祖父・曾祖父・祖父・父親・自分・子・孫・曾孫・玄孫で、これがいわゆる「九族」である。（「九族」とは父族四・母族三・妻族二のことである、という説もある。）しかし、これは死去した祖先と未だ生まれて来ぬ子孫までをも含めた〝理念上の〟集団であり、実質的機能を果たしている集団ではない。実際には自分の高祖父に会うことも玄孫に会うこともできず、曾祖父や曾孫を見ることさえ希なことだからである。このために、実質的に機能している族人集団は、通常祖父母の世代とそれ以下の世代の男性成員及びその配偶者から成るとされる。こうした集団は、少ないときで十数人、多いときでは百人以上に達する。この他、中国には「五服」（つまり五種の服喪の義務）という言い方がある。これほどに発達した区分法は、日本にはない。（訳者注：儒教では、喪服には、両親の喪に服する場合の「斬衰（ざんさい）」をはじめとして、以下親疎に応じて5種類があった。また服喪期間も、両親の服喪3年を最長として最短で3ヶ月の服喪期間が厳格に定められていた。『礼記』参照）

宗族の名称つまり姓氏は、宗族にとり重要な対外的標識である。日中両国の姓氏を考察することで、両民族の宗族集団の特色の違いを明らかにすることができる。

中国には十三億に近い人口があっても、常用されている姓は数百しかない。中国人の昔から今までの姓氏は、分かっているだけで六三〇〇以上あった。しかし、古代の姓氏にはただ文字が違うだけで実際は重複していたのもある。このため、古今の姓氏は大体二〇〇〇前後だったとされる。しかもそれらのほとんどの姓は今では使われなくなってしまった。『百家姓』（訳者注：宋代の文献。諸家の姓を集め、これらを4字1句の韻文にまとめたもの。当時、文字を習う教科書として村塾などで使われたと言われる。）は四六二種の姓を収録しており、漢民族が常用する姓氏はほぼこれに尽きている。

中国人の姓は、少ないばかりか集中してもいる。最新の統計資料によれば、全国で「李」姓は八七〇〇万人に達し、漢民族の七・九％を占める。「李・王・張・劉・陳」五大姓氏の総人口は三・五億に達する。現在、漢民族の姓は押し合いへし合い状態で、同姓同名問題が深刻化しており、重大関心事となっている。大多数の中国人の姓氏はどれも長い歴

史を持っている。筆者の「尚」という姓を例に取れば、ある文献に拠ると、「尚氏は、姜姓、斉太公の後なり、太公は太師尚父と号し、因りて氏とす」とある。[2] この記載が事実とすれば、既に三〇〇〇年以上の由来があるわけだ。中国では、ひとつの姓氏を探し出してきて、遙か古代に遡らせることは思いのままだ。しかも、姓氏の数は多から少へ、複雑な音節から単純なそれへというのが、中国人の姓氏の変遷の大きな特徴となっている。多くの古代の姓氏は後世用いられなくなり、現在常用されるのは数百となってしまったうえに、いくつかの複姓（訳者注：現在でも、司馬、歐陽などの姓にであうことがある。）や少数民族の姓氏は、やがて「単字化」していった。こうした姓氏の数や姓氏そのものの変遷といった特色は、実際われわれが後に述べる中国宗族組織の強大な凝集力とも関係している。

日本の場合は、これと全く対照的である。日本は世界でもっとも姓氏の多い国として知られている。一・二億ほどの人口に、その姓氏は一二万を越えているであろう。近代以前は、大多数の日本人は名はあっても姓はなかった。姓氏は上層の支配階級だけが使っていた。かつての姓氏は、事実上一種の政治組織であり、日本中の姓氏を合わせてもそれほどの数はなかった（有名な源氏や平氏など）。長期にわたり、日本では貴族と武士だけが姓を名乗ることを許されていた。今では、中国人にとっては不思議な姓がたくさんある。[3] こうしたことから、日本人の姓氏の歴史が短いばかりでなく、かなり思い思いに付けられてきたことは明らかだ。長い歴史の中で、日本人は宗族集団よりも更に重要な社会組織があって、それが大きな役割を果たしてきたのだ。しかも大多数の日本人が姓氏をもってよいことになってから、姓氏の数がますます増えていったことは、中国人の姓氏の変遷過程と対照的である。このことは、日本人の宗族組織が中国人の宗族組織のように強大な凝集力を持っていないことの現れとみることができる。

（二）構成方式

中国の「宗族」と日本の「同族集団」は、全く異なる構造を持っている。この違いをまとめて言えば、

第一に、中国の宗族は家族の直接の延長であり拡大であるのに対し、日本の同族集団は母集団（本家）と子集団（分家）から成る連合集団であること。私は日本の家族制度の特色を分析した際に、家族の成員資格認定には、中国人は日本人よりずっと血の共有を重視すると指摘しておいた。中国人が宗族集団に加わるときもやはり同様な原則を尊重する。つまりある者が宗族に加わる資格は、出生や結婚によって決まる全親族体系中に占める位置に基づく。宗族は全く家族がそのまま延長し拡大したものである。宗族集団構成の特質は、宗族集団に加わるのはあくまでも個人としてであって、集団としてではないことである。すなわち、人はいかなる仲介者の手を借りることもなく、宗族の存在を身をもって知ることになる。中国の宗族にも「門」「房」などの枝分かれ集団の区別はあるが、しかしそれは全く相対的な概念であって、これを足がかりに宗族集団に加わっていくわけではない。宗族は集団の連合体ではないからだ。これと対照的に、日本の同族集団は、通常、複数の団体が集まってできる複合体である。前章（訳者注：第一章「家」における中国人と日本人）で指摘したように、日本の家族は、一般に長子のみが家産を継承し家系を維持する権利を持っており、それ以外の者は学芸や養子になることなどを通して別な親族集団の一員になるか、或いは「分家」となって長男に頼るほかない。このような日本の同族組織は、普通ひとつの直系母集団（本家）と、ひとつかそれ以上の傍系子集団（分家）とから成る。中国人が宗族という概念を

問題にするときは、多くの場合、それはある均一な性質（例えば共通の祖先と姓氏を持つ）を持つ者の個人の集合を指していう。ところが、日本人が同族集団というとき、真っ先に思い浮かぶのは性質の異なった小集団の連合ということだ。集団構成の特色から言えば、日本人が同族集団に加わるのは間接的であり、個人にとっては中間集団の仲介を得て始めて同族集団の存在を現実のものとし、かつそれを体得することができる。つまりこういうことだ。個人はまず本家もしくは分家の一員でいて始めて同族の一員になれる。もしも共通の「場」としての本家もしくは分家の中で生活していなければ、たとえ同じ血縁だからといって自動的に同族集団の一員として認められるわけではない。中国では宗族構成の基本単位が個人であるのに対し、日本では同族集団を構成する基本単位が小集団だからである。以下の分析を通して、中国人と日本人が親族集団に加わる場合のこうした大きな違いが、彼らがその他の社会集団に加わるときの方式にどのような影響を与えているか明らかにしていこう。

第二に、中国では宗族成員となるための資格は、日本での同族集団の成員となるための資格に比べ、明確かつ牢固としている。既に述べたことだが、中国の家族の場合は血縁資格を重視する。一個人にとっては血縁資格は生まれてから死ぬまで変わることがなく、長い間会うことがなくても、遠く離れて暮らしていても、また身分や社会的地位の高低、財産の有無などは、家族集団に加わる上で何の関係もない。このため、中国人家族は通常大規模に拡大する一方である。中国人が家族や族人集団に加わるための拠り所が、同じ血縁を資格としているからである。この種の資格は完全に自動的で、単純であるばかりか明瞭なため、宗族集団に加わるために「努力せずに要領よく立ち回って得をする（投機取巧）」ことも必要なく、別な方法を講じて親族集団のような親密な集団を作り上げる必要もほとんどない。たとえ別な土地に移り住んでも、やはり同様な原則で宗族集団に加わることができ、せいぜい一度中断した関係を再開すればよいだけだ。個人が出生によって与えられた親族体系中の地位は不変であり、このためその身分を他人に譲渡することはできない。こうした個人の身分は、同じ土地に居ようが遠く離れた異郷に居ようが関係なく、さらに親族関係が遙か昔にまで遡るものであろうとなかろうと、常に有効だ。また宗族の成員たる資格を失うことを心配する必要も全くない。

これと対照的に、日本の同族集団に加わるための基準は、中国に比べ曖昧かつ広範だ。日本人が同族集団に加わるのは必ずしも自動的ではない。個人について言えば、努力すれば別の親族集団に加わることだって可能だ。日本の婿養子制度は、法律上は言うまでもなく習俗上も正当なこととされており、血縁のない者でもこの制度を通して別な同族集団の一員になることができる。多くの人が師について芸を学んだり或いは故郷を出て生活することなどを通して、自分が帰属する集団を変更してもかまわない。

つまりこうである。日本人が同族集団に加わる資格には、曖昧かつ不確定な要素があり、居住している「場」の要素から受ける影響が比較的大きいのである。同族と同じ家か、もしくはその近くに暮らし、自分以外の成員と「場」を共有していることが必須なのだ。別な土地に移り住んでしまうと、理論上は成員たる資格も失う。つまり血縁があっても、必ずしも族人組織の一員になれるわけではなく、反対に血縁のない者が「家」の一員となって同族集団に加わることだってできるのである。血縁関係を持たぬ「家」ですら、本家の「分家」となって更に大きな統一体の一員になることが可能なのだ。

中国では、比較的大きな宗族はみな正規の族譜を持っていて、これは成員資格の正式かつ明確な記録である。族譜が記載するのは、宗族中の各成員の名・字と婚姻配偶状況及び宗族の出自・変遷・世系・族産・族規などである。凝った族譜には、一族の中の傑出した人物の文学・芸術・軍功・政界などの諸領域での経歴業績、並びに祖先の徳を称える言葉までが記載される。中国人は、伝統的に大官になったり名声を上げると、最初に手がけるのが、人を集めて族譜を編纂させ、できる限り遠い祖先まで遡らせ、水平方向にも各地に分散した枝分かれ集団をできる限り網羅することである。中国の宗族は、祖先を同じくする男性と当該集団に嫁入りした女性を全て包括する。族譜を編纂する際、族人がどんなに遠く別れて暮らしていようができる限り収録しようと務める。中国の家譜・族譜は、世界中で最も発達しかつ最も数が多いものであろう。系譜が発達しているということは、中国人が宗族組織に対してより大きな関心を持っていることを示しているばかりか、中国人が自己の宗族の帰属を変更するいかなる可能性もないことを明らかにしている。

これと対照的に、日本でも中国の家譜に似たものがあるが、しかしそれほど普及も発達もしておらず、主に富と地位のある大家族に限られている。日本人の家譜は、中国の家譜とは違い、全ての死んだ祖先と全ての支系を含んではいるものの、その多くは長男の継承を中心にした家譜である。日本の家譜には家僕や使用人などの非血縁者を含んでいることもあるが、中国人の家譜ではこのようなことはあり得ない。ここから、中国人と日本人は、家譜を編纂するうえでそれぞれ異なった原則に立っていることが見て取れる。しかも、日本人の家譜は現在生存している人から始まって過去に遡っていくのであって、中国の家譜のように、遙かな昔から今日まで下って、始祖以来の全ての枝分かれとそれぞれの枝分かれの中の全ての成員を全員記録していくものではない。両者の方法の違いは実に明らかである。個人の資格の記録があまりはっきりしていないということは、日本人は宗族の帰属を変更することもできることを示している。（訳者注：以前、中国社会科学院の歴史研究所研究員のS氏から家譜の編纂が流行していると教えられたとき、日本では系図がしばしば捏造されることがあると聞いていたこともあり、つい家譜が偽造されることはないのかと尋ねたことがあった。すると、彼はまこと）に怪訝そうな顔をしてそんなことはあり得ないと答えたのを思い出す。）「日本は封建的な国であった。忠誠を捧げるべき相手は親類縁者の一大集団ではなくて、封建領主であった。日本で重要なことは、人が薩摩藩に属するか、肥前藩に属するかということであった。ある人間の絆は彼を自分の藩に結びつけるものであった。[4]」

（三）階層制度：「本家」と「分家」

中国人の宗族と日本人の同族組織には、さらにもう一つの重要な違いがある。それは、日本人の同族集団には明確な階層制度があるのに、中国人の宗族はそれを欠いていることだ。この点は、われわれが第一章で分析した両家庭における階層制度に関する差異と一致している。あるいは、日中家族制度の特徴が同族組織の中にまで持ち込まれていると言える。日本人の同族集団で、本家と分家、血縁分家と非血縁分家の区別は、血縁による差別を重視しているばかりか、経済的利益と社会的地位の点においても不平等になっている。それらの間には、嫡系と傍系、尊と卑、高と下、支配と隷属の関係がある。中国人宗族集団にも、時に「長門」「仲門」などの区別はあるが、この種の区分は一般に序列付けの意味はなく、また「直系」「傍系」といった意味もない。「諸子均分家産」法が行われていることからも、一般に家産を分けるときには全ての男性成員に分配され、各々枝分かれ集団の間に経済的支配・依存の関係は形成されない。祖先祭祀や両親の扶養及び日常生活において、各枝分かれ集団は

概ね平等に扱われ、不平等な立場に置かれることはない。こうした状況は族譜の中にも現れており、中国の族譜は、地位の高低とは無関係に、すべて「一視同仁」に収録して直系・傍系を問題にしない。

日本の同族集団はそうではない。家産の分配では「長子相続」法が行われているので、分家したばかりの家は、少なくとも当初の一時期は経済的に完全に独立することができない（訳者注：現在の民法では「長子相続」は規定されていない。しかし、長年培われた習俗としてそうした考え方がなお根強く残っている地域も少なくないと思われる。）。長男でない者が本家を離れて新たに家を興すとき、財産を分与されることもあるが、それも本家が完全に保全されかつ継続することを前提としたものであり、このために分与される額は本家に遠く及ばない。多くの分家は家業を営み生活を維持できるだけの条件を必ずしも備えているわけではなく、本家に依存しなければならない。例えば、本家から土地や大型の農具や家畜を借りたり、本家の所有になる山林を使ったり、本家を手伝うことで米や生活用品などを得たりしている。本家の所有する土地は広いうえに地理的にも一等地であることが多い。「日本では本家と分家の違いがある。いったん洪水などの天災が起きても、本家は無事だが、分家はひとたび洪水に見舞われればそれでおしまい……。建設省の調査によると、こうした状況が突出している……。」[5]また次のような状況もある。本家が分家の生活の面倒を見てやれないと、分家は別の富裕な家を本家にして、その親族組織に編入してもらい、庇護と服従の関係を作り上げてしまう。本家の儀礼上の地位は分家より高い。同族間の関係を強化するために、しばしば先祖供養をしたり一族の会合などを行うのだが、通常それは本家の特権であり、同時に本家がその権威を誇示する場にもなっている。分家の方は、正月・盂蘭盆・中元などの時には、さまざまなやり方で本家に行って敬意を表す。また分家同士の間にも序列がある。血縁分家は非血縁分家よりも地位が高い。このように、血縁の遠い近いでもって、同族集団はピラミッド型に序列付けされる。つまり、本家はその頂点にあり、血縁分家はそれに次ぎ、雇い人・使用人・小作人などからなる非血縁分家はその最底辺に位置づけられる。

階層制度上の差異は、また族人組織内での物の分配方式の違いも明らかにしている。過去の中国において、多くの比較的大きな宗族はみな公有財産を持っていた。こうした宗族の財産は、義荘・義田・義屋・族田など、さまざまな名称で呼ばれていた。そこから上がる収入は、年一度の祖先の祭りやその他宗族集団を維持するのに使われた。ある宗族の財産は、荘塾・家塾・祀堂・学校を建てるのに使われたし、一族中の優秀な青年を科挙で名を挙げ官界で出世させるために援助したりした。ある家譜では、一族の財産の収入が「貧困を救う」「老人を優遇する」「結婚を援助する」「学問を勧める」「資金を補助する」などのために使われると明文化されており、この意味で中国人宗族集団は平等主義的な福利組織の性質を備えていると言える。中国の宗族内にも貧富の差はあるが、しかしこの種の差は現代社会に見られるものと同じで、序列化されたものとは違う。それゆえある意味では、日本の本家と分家のような固定的な支配と依存の関係を形成するものではない。日本人同族組織は、中国の宗族のような平均主義と互助的共有財産を持たない。同族組織の財産は一般に「本家」に占有されているために、成員の「福利」は共有財産を享受するという形式によってではなく、本家の庇護を受けるという形式によって実現する。

階層制度と関連して、日本人同族組織における「本家」と「分家」は恒久的な恩義の関係で結ばれる。本家が分家に対し恩情を施すのは、本家が血縁中の正統を代表する者として、つまり家系を守る責任者であり

父母を扶養するためばかりでなく、分家の生活を援助しかつその社会的地位を庇護するためにもなされる。本家は分家を無期限に庇護する責任があり、分家は本家に対してその恩に報いる義務がある。本家は恩を施す側であり、分家は恩に報いる側なのだ。分家の成員は言葉遣いや態度において本家の成員（特に家長）に対して格別の敬意を払わねばならず、そのうえ適当な時期（各種の節句や本家の家長の誕生日など）には恩に感じていることを身をもって示さねばならない。このほか、本家が始めたことには、分家は必ず積極的に協力し参加しなければならない。本家はこの分家の報恩行為に必ずしもすぐに応じるわけではないが、しかし分家に面倒なことが起こったときには援助する義務がある。こうして恩義を基礎にできあがった関係は、ある種「主従」関係に似ており、中国人宗族組織には比較的見出し難い。

階層制度は、また族中の指導力や権威の発生とその配置の上に明らかに見て取れる。日本人同族組織において、リーダーとその権威は自然に形成される。つまり長男が黙っていてもリーダーとなるわけだ。他の男性族員は、時に族中の事務的な相談にあずかるものの、補助的な地位に置かれる。本家の家長は決定的な権力を持つ。しかし中国人宗族組織では、指導力や権威は分散される傾向がある。多くの宗族は族人全員の承認のもとに指導力が行使される。こうした指導力は時に宗族会議を通じて行使される。宗族会議は、族中の長老や年長でしかも人望のある者によって構成され、日本の同族団体のように、本家の長男がリーダーになるわけではない。正式な宗族会議がなく、ひとりの族長が一切を取り仕切っている宗族もある。族長は一般に比較的大きな、そして時には明文で規定された権威を持っている。例えばある族規は、「族長は、一族全体の人望のある者、公平に道筋を示せる者でなければならない。事はその大小を問わず、先ず家長に相談すること。そして族中の有識者は、日時を明らかにした上で、廟堂に集まって公開の上審理し、違反の軽い者は罰金を科し、重い者は処罰する」と規定している。[6] 宗族会議と族長の権力は一般に次のようなときに発揮される。宗族の財産を所有し管理するとき、族中のトラブルやその他の民事事件を処理するとき、族規に深刻な違反をした婚姻に干渉するとき、族規を破った者を処罰するとき、等々。比較的大きな宗族は、成員の行為規範を厳格に定めている。これが族規である。族規は、家矩・家規・家法・家范・宗式・宗訓等々と、いろいろな言い方をされている。こうした成文法は、社会一般の道徳や文化の理想を示している。ある族規は、族員は必ず政府の法令を順守しなければならないと規定する。すなわち「王章を尊べ」「国典を崇べ」「国法を守れ」「国課を重んぜよ」などと、族衆は怠慢であってはならないと命じて、そうしなければ厳しく追及するとしている。こうした族規は、実際、部分的には政府の法令並みの役割を果たしている。その他に、族規の中にはいつも「男女を別にす」「夫婦を正す」「閨門を粛（つつし）む」「嫁を訓（おし）える」に始まって「ひそかに蓄財することを許さず」とか、「婦女の軽々しい外出を許さず」とか、「再婚とは節を失うことなり」などの制限がある。族規の定めを遵守すれば表彰される。例えば節婦貞女のために記念碑が立てられたり、孝子の事跡が族譜に記録されたりする。族規に違反した者は、懲罰を受ける。軽い場合は、飲酒の席で罰せられ、宗族大会で名指しで批判されるだけだが、重い場合は宙づりにして叩かれたり、果ては川に沈められたり、生き埋めにされたりすることもある。一般的に言えば、こうした規範はすべての成員に適用される。しかし、日本人同族組織においては、統一的で明確な、そして全ての成員に適用される規範がない。本家と分家は異なる地位にあるから、本家の成員に適用さ

れる規則は分家の成員には必ずしも適用されず、長男に適用される規則は長男以外の者には必ずしも適用されないのだ。

(四) 祖先崇拝

中国の宗族であれ、日本の同族集団であれ、いずれも祖先崇拝を行っている。だが、中国人の祖先崇拝は日本人のそれよりずっと発達し、ずっと精細だと言えよう。解放前、たいていの中国人の家には祖先の位牌をしまう厨子(ずし)が有り、人々は定期的にそれを拝んでいた。全ての宗族集団は自分の墓を持っている。かつて富貴な人たちは、生前の住まいさながらに豪壮華麗な墓をこしらえた。人々は自分の住む家を「陽宅」といい、墓のことを「陰宅」と呼んだ。毎年の清明節には、人々は食べ物を満載した籠を持って墓に行き、亡き祖先にお供えをした。これは死んだ後も家族の一員と見なし、象徴的な形式を用いて衣食住行の品々を提供していることを意味する。中国人の墓は、亡くなった祖先を追憶する場であるばかりか、超自然の力を崇める場でもある。人は生きている間は絶えず祖先を祀り、自分の死後は同様に祀られる。これは人を生命を超越した体験に誘うことができる。人は心中に何か鬱屈したことがあれば、いつも祖先の墓へ行き、泣いて訴えるのだ。そうした意味では墓は西洋の礼拝堂や教会のような役割も果たしている。そうして人々は、墓の「風水」は現実の生活に影響していると考えたがる。豫東地区では、多くの人が今もなおそれを信じていて、もし家に男の跡継ぎが少なかったり、また一人もいなかったり、貧しかったり、いつも病人がいたり、突発的な事故に見舞われたり、男の子が嫁を取れなかったり、奇形の子が産まれたりすれば、それは墓の風水が良くないせいだと考える。

墓地を除けば、解放前まで、族員が多くかつ富裕な宗族は、家廟つまり祀堂を所有していた。祀堂には初代から最近死んだ者まで、全ての祖先の位牌が安置される。一般的に言えば、各枝分かれ集団の祖先祭祀の儀式はそれぞれの墓地で行われるが、宗族集団全体の祖先を祭る行事は祀堂で行われる。こうした状況は今なお続いている。蘇陰氏は一九九二年に中国西北地方の大川村の孔姓が「大成殿」において大型の祭祀活動を行なったことを報告している[7]。祀堂は、宗族会議を開催したり、族中の規則違反者を懲罰する場でもある。

日本人の祖先崇拝は、中国人と明らかに違う。彼らはただ自分たちにとって身近な祖先を祀るだけで、遠い祖先を祀ったりはしない。村中の姓氏を持たぬ「百姓」が集まって一緒に祭祀をしたとしても、共通の祖先を持っていることを必ずしも意味するわけではないし、またそれを証明する方法もない。彼らは、今なお記憶に新しい亡き父母や祖父母或いは近親者のために墓参りをする。「墓地においてさえ、曽祖父母の墓標になるともう薄れた文字の書き替えも行われず、三代前の先祖でさえ、それが誰の墓であるかということが急速に忘れられていく。日本の家族的つながりは西欧と大差のないところまで狭められている。おそらくフランスの家族がこれに最も近似したものであろう[8]。」それゆえ日本人は祖先を崇拝しているのだけれども、家族がいったん死んでしまえば、心の中では家族の一員としての資格も失ったと考えがちなのである。日本には中国のような発達した家廟がなく、祖先崇拝は通常家の中で行われる。日本人も墓を持っているが、たとえ金持ちの墓でも、中国人の墓のような豪壮華麗さはなく、またそこには、中国人の墓のように、生者との間のある種緊密な精神的繋がりもない。墓に埋葬される者が全て血縁者とは限らないし、家僕や作男や番頭といった非血縁者も含まれる。日本人も常に祖先の位牌は神様や非血縁家族の位牌と一緒に家の中の仏壇

の中に置いている。

（五）凝集力と団結心

凝集力と団結心こそが、中国人の宗族組織と日本人の同族組織を比べたときの最も大きなそして最も重要な違いである。

中国人の宗族組織は高度の凝集力と団結心を有している、ところが日本人の同族組織はその点がいささか弱いようである。中国人の宗族組織の凝集力と団結心は主に次のいくつかの点で発揮される。第一、成員に対して各種の保護を与えること。いわば個人を守ってくれる安全地帯である。その与えられる保護とは先ず経済的なものだ。宗族は、全ての者が必要なときに宗族集団から援助を受けられることを保証している。貧しい者は救済してもらえるし、金持ちは支持者と追随者を得られる。宗族からの救済が時に言うに足らぬほど微々たる場合でも、そして族中の金持ちが救済を表向きの口実に搾取していることが否定できないような場合でも、確かにそれは中国の伝統的な社会福利の主要な形式なのだ。もう一つの保護は社会的なものだ。全ての成員は出生により宗族の中での恒久的な立場を手に入れ、そして全ての成員が年齢を重ねるとともに子や孫の尊敬を受けることが保証される。親族集団の外で何か失態した場合でも、宗族集団に戻って保護を求めることができる。宗教的な面での保護もある。宗族組織は祖先崇拝の儀式を子々孫々途切れることなく執り行うことを保証している。この儀式が継続して行われるということは、たいてい誰でも死後に同様な祭祀を受られることを意味する。人は、こうした祖先崇拝から生命の永遠を感じ取ることができる。

第二に宗族集団の成員たちは皆非常に強力な連帯感で結ばれている。全ての成員は自分がその一員であることに誇りを感じている。この連帯感は先ず栄誉を受けたときに発揮される。大きな栄誉を受けるか、または高い地位を得た者は、幼い頃から頼りにしてきた族人集団を忘れてはならない。彼は、たいていの場合、この栄誉と地位を彼が属する族人集団とできるだけ分かち合おうとする。このため中国人にとって、伝統的に「先祖の名を揚げる」ことが、功名を求めるうえでの最大の原動力となっている。人は都で官僚になっても、「錦を故郷に飾る」「栄えてふるさとに帰る」ことを忘れない。宗族の全成員（とりわけ直系の祖先と子孫）は、こうした栄誉の一部は当然自分のものでもあると考えているから、自分も誇らしく感じる。このように成功した族員は、この栄誉を族中の人とできるだけ共有しようとするばかりか、族中の人にそれを分け与えようと考える。中国の古い言い伝えに「一人が道を得れば、鶏や犬まで昇天する」とあるが、これはこうした栄誉の共同享受をいう。このほか、こうした連帯感は責任の分担にも現れる。過去の中国で、族中の成員が重大な罪（例えば朝廷に対する反逆）を犯したとき、この者に対する処罰が宗族全体にまで災いすることがあった。いわゆる「九族を誅滅する」「万門を抄斬する」（一族全員を死罪にし財産を没収する）ことこそは、連帯して責任をとらせることである。族中の成員はこれを宗族集団の恥辱であると考える。「文化大革命」のときの「株連」（連坐）は実際こうした連帯責任の残滓だった。それゆえある中国人が社会で成功を収めると、真っ先に思い浮かべるのは、伝統的に「先祖の名を挙げた」ということだ。すなわち先祖や族中の皆と一緒に名誉を分かち合うのだ。そして彼が失敗したとき真っ先に思い浮かべるのが「先祖に恥をかかせた」「江東の父老に合わせる顔がない」（訳者注：項羽が劉邦との争いに敗れて自刃するときの言葉、『史記』項羽本紀参照。）ということだ。こうした強烈な連帯意識が、一面では古来中国人が積極的に功名を追及して事業を興すときの最大最強の動機となり、他面重苦

しい人間関係の重圧となる。「閨閥関係（訳者注：原文は「裙帯関係」で、直訳すれば「スカートとそれを縛るひもの関係」となる。妻の実家の関係でよい官職を得ている男子、またその官職それ自体を、比喩的に「裙帯」という。）」といった腐敗の風潮の文化心理的淵源となっている。

第三に比較的強い求心作用と団結心である。戦争や飢餓そして移民などが理由で、宗族の成員が離れて暮らすこともあるが、そのようなときでも宗族集団はいつも安全地帯として守ってくれる。どこへ行こうが、どれほど離れていようが、地位にどれほどの変化があろうが、成員資格を失うことはあり得ないし、その宗族集団の責任と義務を忘れることもない。中国人は皆、伝統的に、自分の宗族集団に回帰していこうとする心理的傾向を持っている。過去の中国人はどれほど大官に出世しても、罷免されたり引退した後は、故郷に帰るのが第一の選択だった。今日、世界各地に広がっている華僑やその後裔たちの、なかでも年老いた世代に「落葉帰根」（死んで故郷の土に戻る）の思いがあるのは、こうした求心的傾向の反映そのものである。宗族集団としてみれば、宗族の成員がどこへ行こうと、なお族員の一人と見なすわけで、族譜を編纂するときも、彼の名前を決して忘れたりはしない。家譜は、時間上は全ての死んだ成員と生きている成員を含み、空間上あちこちに広く散らばっている支系の者も、その地位や貧富の如何にかかわらず、可能な限り取り込む。この極端な例が二つのスーパー宗族、孔姓と孟姓だ。孔氏の宗族は孔子一人から出ており、孟氏の宗族は孟子一人から出ていて、彼らの系譜は混乱もないままに今日まで保持されている。今日、全国各地に散っている孔姓や孟姓は、皆二千年以上も昔の孔子や孟子を祖とする血統を辿って、そこから彼らが一つの宗族に属していることを証明することができる。一般的な宗族集団はこれほどではないにしても、求心的かつ凝集的傾向を持っていることに変わりない。家族は、いついかなる状況下でも、常にその成員が戻ってくることを歓迎し、かつあらゆる援助を与える。新聞やテレビなどでいつも目にする、海外の華人が懐かしの故郷に帰ると、人々から熱烈な歓迎を受けるという報道などは、このことを生き生きと説明している。

宗族集団の成員間の連帯責任は、彼らを常に一致団結させる。普段は互いに助け合い、外から脅威が降りかかれば共同してそれに当たる。共同の墓地や祀堂・家譜はこうした団結を生み、族中の有名人を誇りに思うこともこうした団結を更に強化する。いわゆる「ひと筆で二つの×は書けない」とは、この意味なのである。果ては、二つかそれ以上の家族が同じ姓でありながら、共通の祖先やまた系譜上の繋がりが必ずしもなかったり、またそれを証明できないようなときでも、地位を高めるために連合するというような状況すらもありうる。こうしたやり方を「連宗」という。

もちろん右のように言ったからといって、宗族内部に階級の分化も圧迫や衝突もないとか、族人の団結はいかなる時でも牢固として有効に機能しているなどと言おうとしているのではない。事実、族人を団結させるための施設やスローガンが、族中の金持ちや高位者に利用されることがしょっちゅうある。族内の階級分化があることや、まとまりのない宗族があるのも確かだ。しかし否定できないのは、われわれの社会や文化が全体としてこうした団結をとかく鼓舞しがちで、しかもこうした呼びかけは確実に多くの中国人の心を打つことができるということなのだ。

それに比べると、日本人同族意識における求心力はかなり弱く、個人に対する拘束力もかなり小さい。「血縁資格」よりも共同生活の「場」を重視しているために、個人が所属する族人集団をひとたび離れてしまうと、理論上は成員としての資格を失うことになる。それゆえ再び族人

集団に戻ってきたとしても、中国人が受けるような歓迎は全く受けられない。中根千枝は、「日本では、いったん自分の村を離れ、他の土地に長く滞在した者にとって、再び村人になるということには非常な社会的抵抗がある。自分の父が生存していればまだいいが、兄弟・甥の代になってしまっている故郷の家というものは寂しいものである。[9]」これは日本人研究者の見解であるが、このことはわれわれが入手した実例と一致する。

二つの宗族組織の凝集力が異なることを説明するために、いくつかの具体例を挙げよう。

西村（訳者注：著者の故郷。河南省の農村）での筆者の調査によると、解放後に項氏の宗族に戻ってきた例が二つあった。一人はXDSという族人で、約五〇年前、祖父に連れられて西村から一五里ほど離れた溝村に越して行ったのだが、一九六六年に戻ってきた。彼が戻りたいと申し出たとき、族中の近親者は既に死亡しており、遠縁の姪がただ一人いただけだったが、相対的に見て近親であるという者たちから熱烈な歓迎を受けた。彼らは引っ越しの手伝いをしたうえに、家を建てるための費用まで出してやった。二つ目の例は、一九八八年のことである。当事者XWXは、四五歳の時に両親と死に別れたために、秦奉村（西村から一・五キロメートル）に嫁いだ姉のもとに行きそこで成長した。五〇年代に湖北省の洪湖県に移り、一九八八年に西村に戻った。彼の一家は六人だったので、村は彼らに六人分の土地を分けてやる必要があった。これは西村の人にとっては大きな負担だった。その一家を拒絶する理由だってあったのだが、しかし彼らはそうはしなかった。村人はすぐさま彼らに土地を分けてやったうえに、家を建てるのを手伝い、彼の息子のために嫁まで世話した。筆者が、幼い頃から暮らした秦奉村に戻らず、勝手も知らない西村に戻ってきたのはなぜかと尋ねたとき、彼は次のように答えた。「姉が死んで、もう肉親はいないのだから、やっぱり族に戻るのがいい」と。村に戻ったばかりの時は、誰一人顔見知りはいなかったが、ここ数年はよそ者だからということで除け者にされたような感じは少しもなかったとも言っていた。これらは西村の項氏という宗族の二つの例に過ぎない。こうした例はその他の宗族にもあることだ。実際この二つの例が示す中国の族人集団の強力な凝集力は、ある程度普遍的な意味を持っている。

もう一度日本の場合を見てみよう。日本の侵華戦争時に、中国に残留した日本人孤児の日本での肉親探しの事例から、日本の族人集団が中国の族人集団と異なる特徴を持つことは明らかである。

一九八一年から一九八七年初まで、前後一五回、合わせて一四八八名の日本人孤児たちが帰国して肉親探しをした。彼らの大多数は中国で成長し、その生活習慣や価値観は中国式のものであった。彼らは日本に戻った後、いくつもの大きなカルチャーショックを受けた。例えば言葉が通じない、生活習慣が違うなどであったが、中でも彼らが最も意外に感じたことは親戚たちの冷淡さであった。報道では、MTという名前の孤児が、一九八六年に一家五人で永住帰国し、ある親戚一家と一緒に暮らしていた。間もなく、関係が非常にぎくしゃくして、別々に暮らすほかなくなってしまった。別れた後、両家族は二度と行き来しなくなった。その主な原因は、親戚たちはMTのあまりにも人に依存した生活態度に対応しきれなくなり、MTのほうも冷淡な人間関係に我慢ならなくなってしまったのだ。親戚たち言わせれば、家探しを手伝ったり、食事の面倒を見てやっても、「ありがとう」の一言さえ言わないのでは我慢できないということであり、MTに言わせれば、親戚の仲間入りをしたばかりなのだから、世話を受けるのは当然のことだし、これまでだって最

低限の世話しか受けていないではないかということなのだ。彼は小さな頃から親族集団が固く結びつき相互に助け合う中国で暮らし、困った者がいれば皆が助けてくれたし、親戚に助けてもらうのだって遠慮は要らなかったのである。[10]

中国に残留して中国人と結婚した日本女性が日本に帰ったときは、さらに親戚たちから除け者にされ、挙げ句は、親戚たちから会うことさえ拒絶された。例えば、一九八六年の年末に、六人の日本人妻たちが日本に行ったときには、日本の親戚は迎えてくれず、ホテルで大晦日を過ごすほかなかった。[11]

筆者が把握しているたくさんの帰国孤児の生活に関する報道の中で、親戚づきあいが希薄だと嘆いているのが目を引く。ところがその反対の、骨肉の情の深さに感動したり、親戚の熱烈な歓迎を受けたという報道はひとつもない。このことは中国の親族集団が戻ってきた者を歓迎するのとうらはらだ。更に考えさせられるのは、こうした冷たい仕打ちを受けたという報道について、日本の社会は何の反応も示さないし、人々はそれを当たり前のことだと考えているらしいことだ。このことを、両国の経済レベルが違うために起きたこと、すなわち日本人は自分がまきぞえになることを恐れているからだと解釈している人もいる。しかし、豊かなところから帰ってきたとしても、受ける扱いは大していいものではない。[12] 筆者は日本の親族集団の構造上の特色からこの現象を解釈したい。「場」を重視する親族集団は、「血縁資格」を重視する親族集団のような求心力は全くもっていない。「場」を重視する制度の下では、人と人との親密さの度合は、触れあう時間やその頻度と正比例する傾向がある。いったんその場を離れてしまった後では、中国人のいわゆる「人が去って茶が冷える」（訳者注：「去る者日に以て疎し」という諺と同じ意味であろう。）の状況が生まれやすく、しかも再び親族集団に戻ってきたときには、除け者にされやすい。

二　族人集団の変化

（一）族人集団が変化していく異なったプロセス

これまで中国人宗族集団が日本人同族集団に比べて発達しており、また精巧にできていることを見てきた。中国人の宗族組織は彼らの世界観や行動様式にも深刻な影響を与えている。許烺光博士によれば、宗族は中国人にとって最も主要な二次集団である。多くの歴史学者は中国を「宗法社会」と呼ぶ。名前がどうであれ、この事実こそは、宗族制度が伝統的に中国社会の一大特色であることの反映なのだ。宗族制度がわからなければ、中国社会がわかるはずないし、中国人の文化心理もわかるはずがない。政治的には絶えず王朝が代わり、大規模な戦争や人口移動も絶えずあったけれども、しかし宗族制度そのものがひどく破壊されたことはない。宗族制度が中国数千年の文明社会の基礎を形成してきたといっても過言ではないのだ。

中国であれ日本であれ、宗族組織の確実な変化はみな近代以降のことだ。交通の発達や人口移動の加速、そして西洋的価値観の影響、とりわけ都市の発達は、伝統的な宗族組織に変化をもたらした。しかし見過ごしてならないのは、中国と日本が近代社会に向かって変化していく過程で、こうした「家」を基礎として発展してきた宗族或いは家族の組織の変化は、それぞれ異なった道筋を辿っているということだ。宗族とか家族の持つ力は、今日の中国人や日本人の意識や行動方式になお相当の影響力を持っているが、しかしその現象の仕方は一様でない。

日本が近代社会へと変化していく際に辿ってきたのは、改良というプ

ロセスであった。すなわち宗族組織は破壊されることなく、しかも自らの手で近代社会に適応するべく改造するというプロセスを辿ってきたのだ。日本人の同族集団組織は改造されて比較的速やかに近代社会に適応し、家族意識は日本的特色を備えた現代企業意識に生まれ変わっていった。この問題に関しては後に詳論する。このことは、日本社会の都市化が、中国社会より早期にかつ速い速度で進んだからばかりではなく、もっと重要なことは、日本人の家族組織の構造特徴が近代社会の集団構成のあり方とそっくりだったために、近代的社会組織に容易に転化させ得たことによる。同族集団における母集団（「本家」）と数個の子集団（「分家」）の構成は、近代社会における本社と支社の関係と極めて類似している。人々の同族組織への加わり方と、人々の現代社会組織への加わり方とが、そっくりなのだ。このほか、日本の親族集団が血縁資格を重視するにしても中国人ほど厳格ではないから、日本人が血縁集団から近代的社会組織に向かう際に、個人の心理や行動様式に受けたダメージは、中国人に比べかなり少なかった。

ところが中国人の宗族組織の変化はこれとは別なプロセスを経過した。中国は近代化の過程で比較的徹底した社会革命を経験したために、宗族制度が大きな打撃を受けた。主に次のいくつかの点でそれが現れている。

第一は、徹底した土地革命が宗族制度の物質的基礎を破壊してしまった。族田・義荘などの宗族の財産は分割され、祀堂は破壊されるか小学校やその他の公共施設に転用された。活動のための経費も場所もなくなったために、昔のように祖先祭祀ができなくなってしまった。宗族の墳墓も土を被せる者がいなくなり、どんどん小さくなっていった。

第二は、農業合作化以後に作られた生産大隊や生産小隊が宗族組織の機能を弱体化させてしまった。生産隊は、なによりも先ず生産組織であったから、土地の経営はもはや一家一戸を単位としてではなく、生産隊によってなされることとなった。生産隊はまた、民事紛争を処理したり、社会福祉・社会互助を行う組織でもあったから、実際上村民の日常生活全てを管理することとなった。過去に問題が起きれば族長やその他の人望ある族人を頼って解決してきたのだが、生産隊ができてからは、主に隊長や大隊幹部を頼ることになった。こうして宗族組織の機能は非常に弱体化してしまった。生産隊は居住地域ごとに作られ、多くの場合、同一宗族に属する人々がひとつの生産隊に組み入れられはするが、普通はひとつの生産隊には必ずひとつ以上の宗族集団が加わった。異なる宗族の人たちが一緒に労働したり、会議を開いたりして、宗族を越えた繋がりが増え、人々の間に新しい絆ができあがっていった。「大釜の飯を食う」生産隊が宗族組織に取って代わり、各人に新たな安全地帯を提供したのである。

第三は、階級の重視や旧制度・旧価値観に対する批判が宗族意識をある程度希薄にしてしまった。中国共産党は階級区分を重視し、人を財産や搾取状況によって地主・富農・中農・下層中農・貧農と顧農とに分類した。相次ぐ政治運動において、「貧農・下層中農に依拠し、中農を味方にして、地主・富農をやっつける」というやり方は、宗族制度に瓦解作用を引き起こした。共産主義革命は中国人に新しい原則と理想・道徳をもたらし、共産党は中国人を家族と宗族に対する忠誠から抜け出させて、もっと広い社会の舞台で活動させ、家族や祖先のためにではなく階級の利益のために献身させようとした。こうした目的を実現するために、新政府は、各種の、例えば「親不親は、階級が分かつ」の類の新しい価値観を喧伝することによって、人々の宗族に対する忠誠心を弱める

などの措置を取り、「移風易俗」（訳者注：これまでの風俗習慣を一変させること。『詩経』や『孝経』などに既に見えている成語。）を提唱し、古い風俗習慣に反対した。例えば、火葬したり墳墓を平地にしたり家譜を焼いたり死者には追悼会を開いたりして、古く大げさな祖先祭祀のやり方に代えさせた。[13]

中国人宗族組織が外部から受けた衝撃は、日本人同族組織が受けた衝撃に比べ遙かに激烈であったと言うべきであろう。だがもしも何千年と続いてきた中国の宗族制度が一度の社会革命のために徹底的に破壊され、宗族制度が中国人に与えてきた影響が日本人に比べてさらに徹底的に取り除かれてしまったなどと思ったら、それは間違いだ。中国人の宗族意識が破壊されたのは、だた形式上のことで、（共産主義のイデオロギーと）ぶつかったのは表面だけであり、その影響力は今なお極めて大きい。なぜなら、それは第一に、中国人宗族組織はもともと日本人同族組織に比べかなり強固で発達したものだからだ。宗族は、中国人の重要な社会集団であるばかりか、同時に中国人の生活方式であり意識形態でもある。宗族制度は、目に見える形（例えば、組織・財産・制度）としては社会革命によって破壊することもできようが、目に見えない形（例えば意識となり生活様式となっている宗族）としてはそう容易に変化しないものであり、少なくとも二つが同時に変化することはそれほど容易ではない。極左路線が取られたときですら、宗族制度は見かけ上弱体化したに過ぎない。中国人宗族組織は、近代社会組織に転化していく上で、日本人同族組織に比べ遙かに大きな困難に直面している。第二に、宗族の力を弱める最も有効な手段は都市化である。大都市では、人々は出身地もさまざまで親族関係も希薄だから、強力な拘束力を持つ宗族組織を作り上げることができない。中国では、社会革命が行われた後も、都市化のテンポは緩やかで、大多数の人々はなお同族同士固くまとまり、伝統的な力が強く残っている村落社会で暮らしている。このような社会では、宗族の力を弱めることはとても難しい。族田を分配し、祀堂を取り壊し、宗族の墳墓を平地にしたり、また強制的な方法で宗族の祭祀活動をやめさせることもできよう。さらにはまた威嚇的な「旧を破り新を立てて、風を移し俗を易える」といった大衆運動を展開することもできよう。しかしそんなことをしても宗族制度のうわっつらを引っ掻くだけだ。こうした外からの力がいったん弱まると、宗族の力は再び盛り返す。人々がなお農村に暮らそうとする限り、そして新しい社会関係が打ち立てられない限り、宗族の繋がりがその重要性を失うことはあり得ない。

それゆえ、八〇年代初め農村で責任制が実行された時、政府が村落社会への干渉を減らしたところ、宗族の力は息を吹き返した。責任制の実行により生産隊の役割は大幅に減退し、一家一戸は再び経済的に独立した生産単位に戻った。どの家族でも働き手が少なければ、あれこれと手助けが必要になるわけだが、このため宗族の繋がりが再びもとのように重要になっていった。その他、責任制になってから農村の各家族間のトラブルが大いに増えた。土地の分配・化学肥料・引水・電気の使用・請負項目の調整などの問題でしょっちゅう対立が起こった。自分の利益を確保し、また他人に馬鹿にされないために、もともと疎遠だった親戚・族人がまたもあれやこれやと近づき始めた。ある宗族は族譜を再編纂し、祀堂を再建し、長いこと中止していた祖先祭祀の活動や、その他祖先崇拝の儀式を再開した。法事の場所をこしらえ、「紙人紙馬」（訳者注：葬式に用いる紙製の人形や馬。死後の生活に不足がないようにとの宗教的理由による。紙銭を死者のために焼くのも同じ理由による。中国人の他界観がよく示されている。）をこしらえ、豪華な墳墓や棺をこしらえ、幟（のぼり）を立てて棺（ひつぎ）を送るなどといったことが再び盛んになってきた。農村だけでなく、上海・広州のような経済の発展した地方

でも宗族パワーの復興が見られるようになった。

(二) 現在の中国人宗族パワー

要するに宗族制度が現代中国人に与える影響力の大きさは次の二点に集約できる。

第一は、宗族はある有形の社会制度の形式をとって、広大な農村部で今なお人々の行為規範として比較的大きな力を持っていることだ。農村の宗族組織は今なお一部で法の執行機能を持っており、人々の行動を規定したり、婚姻に関与したり、社会福祉と相互扶助の役割も果たしている。筆者が調査した西村の項氏宗族では一九八五年に「宗譜」を再編纂し、平らにならされてしまった祖先の墳墓を修復した。一九八六年の清明節から大規模な祖先祭祀の行事を復活し、同族間の親近感と連帯感を再び回復させた。その他、宋挙誠・喬潤令両氏が行った山西省臨汾・長治及び雁北地区の三つの県と四つの郷にまたがる八ヶ村の調査によると、「西賈郷徳西毛村の李姓家族は共同の墳墓と祀堂を持っている。毎年の清明節には、四つの同世代の家族が輪番で祖先祭祀の儀式を主催することになっている。こうしたことの目的は、彼ら自身の口から言わせると、『子や孫の世代の連中に見せておけば、自分も一族の一人であることを忘れないだろう』ということだ。これは実際、家族の団結を強化して、それによって互いに助け合い、外からの圧力が加わったときには、一致してそれに当たることを意味している」と言っている。[15] また、彼らは現在当該地区で家族の勢力が新たに台頭してきたことの現れとして、次のように述べている。

まず、兄弟の多い家族がつくる勢力。こうした家族は必ずしも「四世同堂」の大家族ではなく、幾人かの兄弟はみな独立している。だが、直接の血縁関係にあることと、どの家にもはたらき盛りの若い男がいるために、一家で事が起きれば、みなが出動する。

次ぎに、同族の家族がまとまってつくる勢力。こうした勢力は「五服」ほどではないものの、血縁で結ばれた親戚同士の緩やかなネットワークを作っている。その結びつきはさして緊密ではなく、以前に比べれば遙かに緩やかである。しかし、彼らは人数が多く、カバーする範囲が広いので、農村生活においては大きな役割を果たしている。

第三に、姻戚との連携による勢力。これも家族勢力のひとつの重要な現れであり、姻戚関係は農村においてはごく普通にある。姻戚となる理由は、多くの場合、一定の実力と支持を手に入れ、ある家族の勢力に加わるためである。村の中の小戸・小姓の者は姻戚を結ぶことで、大戸・大姓の家に仲間入りしようと切に願っており、農民自身もそれを「先天の不足を後天で補う」と称している。

宗族勢力が政治権力に与える影響については次のように言っている。

表面的に見れば、村の幹部は大権を握っており、村の形勢を左右している。しかし、われわれの調査が進むにつれ、現在の村生活の重要な場面で決定的な役割を果たしているのは家族勢力だ、ということがわかってきた。村では、事の大小を問わず、背後にある複雑な家族関係のネットワークが常にからんでくる。村の幹部が当選できるかどうか、仕事がうまくいくかどうかは、背後にある家族関係と大いにかかわってくる。彼らが職権を行使するときには、村の各姓

各家族間の関係を考慮しなければならず、村幹部はわれわれに、「自分のやることは、『半分は人情、半分は公事』であると言っている。村幹部自身、家族の網から抜け出ることはできず、実際、汾城鎮西圪村の五人の村幹部中三人が親戚または姻戚関係にある。

目下、農村で「族譜編集」の風が盛んなのは、宗族の繋がりが強化されていることの現れである。八〇年代以来、多方面から報道され、人々の注目を集めてきている。[16]

第二は、目に見えない「深層結合」の宗族制度が、中国やその他の社会組織の構成方式及び中国人の行動方式になお深刻な影響を及ぼし続けていることだ。農村と異なり、現在の中国の大都市でなお重要な社会的経済的機能を持った家族或いは宗族集団を見出すことはもはや困難である。しかし、この制度は今なお人々の思想や行動に影響し続けている。中国人は家族制度という安全地帯の中で生活してきた。もしこうした安全地帯がなくなってしまったら、それとよく似た機能を持ったものを新たに作り出そうとするであろう。新中国の企業組織の構成方式や人間関係のモデルなどは、今なお宗族制度の影響を受けているといえる。こうした影響があっても、多くの場合われわれはこのことに気がつかないだけなのだ。解放後相当長期にわたって、いくつかの企業（例えば、鉄道・郵電・教育などの部門）は内部から新規採用したり退職者の補充をしたりする場合、子供は父母の職をそのまま引き継ぐことができるというやり方を取ってきたので、企業の中の人間関係は「親縁化」の傾向を生み出してしまった。こうした状況は、とりわけ山間部に設けられた軍需企業において比較的深刻であった。章啓新氏のレポートによれば、航空工業部に所属する天寧無線電信工場は、創業以来二〇年間、「需要に見合った生産を行いながら職工の家族の面倒を見ることが困難だったために、職工の配偶者や子女及びその親族らを常に採用してきた。現在、一家族二人が同一工場に勤めている職工の割合は七八・九％である。創業した当初は、一家族三人が同じ工場に勤めるなどということとはほとんどなかったようであるが、二〇年を経過して総数の三八・九％がそうなっている。工場の規模が変わらずこのペースで行けば、一二年後には三人以上の親類関係にある者が就業している率が全体の七〇％を占めるまでになろう。」「山間部の少なからぬ軍需企業では、さまざまな親戚関係にある職工がもはや全体の五〇％以上を占めている。ある老職工は子供が比較的多く、また職場結婚して一家を形成したので、既に数十人にも上る親類関係のネットワークができあがっており、企業のなかでひとつの巨大な家族を作り上げている。こうしたことが蔓延していけば、遠からず、ひとつの親類関係のネットワークが企業全体を覆い尽くし、絶対多数の職工たちは封建的色彩の濃厚な宗法集団に隷属させられることになろう。[17]」

もちろん、この種の軍需企業は特殊な例だ。なぜなら、都市から辺鄙な山間部に移転して、周囲の農村との往来もほとんどなく、経済的文化的に閉鎖された孤島になってしまっているからだ。しかしこうした「親類化」現象はいくつかの企業（とりわけ郷鎮企業）にも少なくない。このために、ある人はこの種の現象を郷鎮企業における「二大爺」現象（お互いに名前で呼ばずに親族間の称呼で呼び合う）と言っている。筆者の知る豫東地区のいくつかの県営・郷営工場はこうしたやりかたで新規採用を行っている。工員たちがめいめい自分の親族を紹介すれば、試験で選抜する必要がなくなる。これは実際、工員たちに元来の親族関係を工場内に移植させることになる。

現在の大都市の多くの「工作単位」は農村の「生産隊」のようなものであるが、ある程度までは家族としての機能も備えている。今日、大多数の都市に住む人は皆、ある「単位（ダンウェイ）」に属している。中国人の「単位」は外見上は通常次のような特徴を持っている。すなわち高くて大きな塀が単位の内部と外部を仕切っており、門には守衛と受付がいて、部外者をチェックしている。歯磨き工場であれ、歌舞団であれ、はたまた学校であれ政府機関であれ、その内部には幼稚園・医務室・映画館・プール・売店・浴場等々…が欠かせない。大型企業の単位は、監獄以外は何でも揃っている。果ては、裁判所・派出所、そしてそれなりの規模を持つ火葬場まで揃っているのだ。このような単位はまるで小さな国家のようだし、荘園のようだし、また「都市の中の村」のようである。その機能から見れば、われわれの単位は実際上、大家族が持つ社会的機能を今なお果たしている。この大家族の中で、人は生まれ、育ち、死んでいく。その帰属先を変えることはできない。家長あるいは族長は、家族成員に対するサービスや管理やらのほとんど一切を取り仕切る。子供の名付け親となって、学校に上げるところから、家のために仕事に就かせ、結婚させて葬式を出してやるところまで、何にでも関わってくるのだから、「揺りかごから墓場まで」と言ってもよく、成員の一切合切に及ぶのだ。だからある「単位」に所属すれば、たとえようもない安心感を持つことができる。もしもある「単位」に〝隷属〟していないと、「孤児」になってしまい、多くの面倒を抱えなければならなくなる。

おかしな行動をする者がいたり、或いはよそ者が入ってきて何事かをしようものなら、先ず聞くのは「どちらの単位（ダンウェイ）の方ですか」である。もしも自分の単位が言えなければ、その人は信用されない。「単位内部」の規定は、「単位外」の人には決して適用しない。当該単位の人のプール入場料が五元だとすると、よその単位の者はその倍額。八〇年代中期までずっと、大学の卒業生はみな単位に「分配」され、しかも大体の場合それは終身雇用であった。単位に属することが、安定した安全地帯にいられることだった。単位から解雇されることなどあり得ず、「鉄の飯椀」は生活の安定を保証した。しかしその見返りに、終生単位に忠誠を尽くさねばならず、「工作単位」を変えようとしてもそれは非常に困難であった。単位が収入を決定し、住まいを分配し、医療保健のサービス、子供の託児所や学校を提供し、配給切符や映画の入場券を配り、「春の旅行」や「秋の旅行」を組織した。工場のリーダーは生産を管理するばかりでなく、職工の宿舎や療養所を手配し、新年や節句には魚肉を配給し、政治教育をし、交通規則を守らせ、さらには「五講四美三熱愛」教育（訳者注：著者の尚会鵬氏に尋ねると、「講文明・講礼貌・講衛生・講秩序・講道徳、心霊美・語言美・行為美・環境美、熱愛祖国・熱愛社会主義・熱愛共産党」のことであると教えられた。）や適齢期を過ぎた男女の恋愛・結婚問題まで、さらには計画出産等々まで考えてやらねばならない。こうした情況下では、校長は、管理者であるばかりでなく、家長でもあり、職工たちの父母官（訳者注：古くから為政者は民に対しては父母のようにふるまうべきとされたことから、地方官僚はその土地に暮らす民衆の保護者のように治めた。）である。改革開放以来、こうした状況は変わってきたが、しかし単位が持つ家族としての機能は大多数の者にとって今なお極めて重要である。大多数の者は、単位が分配してくれた住宅に住んで、単位のさまざまな福利を享受している。新年や節句になると多くの単位は魚や肉、食用油、果物、卵などを配る。もしも単位に突然このような機能がなくなってしまったら、われわれはきっと受け入れ難いだろう。現在の改革でのいくつかの恨みや不満の多くはこうした受け入れ難さに起因するものと言える。

都市化の進展につれ宗族組織は間違いなく衰退し、宗族制度の影響力も弱まった。中国の都市の企業改革が進むにつれ、中国人の「単位（ダンウェイ）」も

次第に家族としての特色を失い、現代企業に転化していくものと思われる。長期的に見て、宗族制度に対して更に大きな影響を及ぼすのは、現在実施されている「ひとりっ子政策」である。もしもこの政策が三世代にわたって実施されたら（当然永遠に実行するわけにはいかない）、中国人の親族ネットワークは大いに単純化されて、中国は世界でも最も徹底した「核家族」からなる社会になってしまうだろう。われわれはそうなったときに人々の思想や行動にどのような変化が起きるか予測できない。しかし、親族集団を超越した「市民社会」や「市民文化」を形成していく上ではずっと有利になるであろう。

三　族人集団及び個人の心理と行動様式

（一）個人の心理と行動方式への影響

日中両民族における族人集団や族人集団の特徴を備えているそれ以外の集団が取っているそれぞれの構成方式の差異が、両民族の個人としての心理や行動様式にも異なった影響を作り出している。中国の家族制度のもとでは、個人は人間関係のネットワークにしっかり繋がっているので、その中で人々は無条件で互いに依存しあえる。中国人にとって親族という永遠の安全地帯は、心理的に高度な安心感と落ち着きを与えている。彼の親族集団における譲渡できない身分は永遠に失われることはないし、「仲間はずれ」になる心配もほとんど要らない。たとえ長年離れていても、族人集団は彼に冷淡になることはあり得ず、いつでも彼が戻ってくることを歓迎する。このように、彼がそれ以外の集団に加わることに失敗したときでも、受ける打撃はそれほど深刻なものではない。逃げ道が残っているからである。それゆえに中国人はどこにいてもその境遇に悠然と安心自得していられる文化心理を持っている。解放後に形成された仕事のための「単位（ダンウェイ）」も、宗族集団のように個人に全面的保護を与え、高度の安心感をもたらしている。西洋の企業は個人を大きな機械のちっぽけな部品と見なしているから、もちろん個人として高度の自由はあるけれども、しかしいつだって解雇される心配がある。それゆえ自由は十分あるが、安心感が不足している。われわれの単位は個人を子供のように見なしており、あたかも家長が子供を家から追い出すことはあり得ないように、単位が彼を解雇することはあり得ない。彼は仕事を変える自由はないけれども、失業の心配もない。みなが同じ位の給料をもらい同じ位の家に住んでいるために、貧富の差がもたらす不満もない。人と人の間には何の秘密もなく、競争もない。だから特に他人を警戒する必要もなく、仕事上の不満もたいしたことはない。彼の一生は概ね決まり切ったパターンで過ごすことになる。（だが改革開放以来、こうした情況に変化が兆し始めた。）この点は伝統的な家族制度が個人にもたらした影響と似ている。

ところが日本人には中国人のこのような強固な族人組織の保護を欠いている。日本人は小集団の中で安心感を求める。この種の小集団の境界は比較的曖昧でしかも変化し易く、その集団の成員資格を失うこともあり得る。それゆえ中国人と比べた場合、個々人は心理的にずっと大きな不安感を持っている。長期にわたり、日本の企業は「終身雇用制」を実行してきており、西洋人のように簡単には解雇しないので、当然ながら日本人に大きな安心感を与えてきた。しかし、この種の安心感は主に個人が属する小集団を通して実現される。しかもこうした小集団の成員資格は中国人の宗族の成員資格のように生得的でもなく恒久不変なものでもない。そして個人の親族集団に加わる資格が多くの不確定要素を抱え

ているように、小集団に加わるときの資格もそれ以外の要素（とりわけ「場」の要素）の影響を受けやすい。小集団を離れた人は、当該の集団から次第に疎遠になる傾向がある。自分が献身する集団との間に帰属にからむ問題が起こったときには、親族集団のような十分な保護がないために、心理的に受けるショックはとても大きい。所属する集団（とりわけその集団が上流社会に属するようなとき）から排斥されることは失敗と零落を意味するので、心理的には極めて悲惨なことになる。彼には逃げ道もなく、またそれ以外の道を選ぶことも容易ではない。それゆえ彼が最も心配することは、「仲間はずれ」、すなわち所属集団から見捨てられることなのだ。人は一般に「仲間はずれ」にされる心配から、所属する集団との一体化意識へと駆り立てられる。その主要な現れが、集団内で上司やその他の権威によりいっそう厳格に服従することであり、自分の階層序列中の位置をよりいっそう固く守ることであり、己の行動や発言をいつも礼節と己の地位に適うようにして忠実一途に小集団のためによりいっそう献身することであり、新入りや出戻りに対して優越感を持つことであり、僭越な者や不忠な者に対しては譴責を加えること、等々なのである。個人が小集団に献身的であればあるほど、小集団と心情的に親密と協調の度はいっそう深まっていく。しかも小集団がこうした特徴を持っていればいるほど、個々人にとっても、ますます離れることも取り替えることもできないものに変わっていき、そのことからまた更に小集団から見捨てられることに対する恐怖が募ることになる。

中根千枝によれば、中国のように資格を重視する社会では個人の集団に対する帰属は多重的になるという。すなわち個人は同時に二つかそれ以上の集団に所属するのに対し、日本人の帰属する集団は単一なのである。たとえ同時に複数の集団に所属していたとしても、必ずそのうちのいずれかが決定的であり、生死がかかっている集団なのである、と。けれども、筆者は更にこのように考えたい。中国人ばかりかそもそも日本人（或いはそれ以外の文化的背景を持つ者）でも集団への帰属が単一ということはあり得ないし、しかもこうした集団がいずれもみな当人たちにとって同等の重要性を持つということもあり得ない。中国人と日本人が、集団に帰属する上での差異は、複数か単一かにあるのではなく、中国人にとっては、親族集団が取り替えることができない最も重要な意味を持っていること、彼がその集団に加わる資格は明確で恒常的だということにある。ところが日本人にとって、親族集団は決して第一義的なものでなく、最も重要な集団帰属原則は、縁有って加わることになり、朝から晩まで一緒に過ごしている、あるひとつの共同の「場」の中の集団によって決定され、しかもその集団に加わるための資格は不確定要素ばかりだということなのだ。中国人の背後にはひとつの明確で恒常的な親族集団があるために、彼はいついかなる場合でも、族人の助けを期待できる。親族以外の集団において何か失敗したとき、親族集団の所に戻って保護を求めることができる。中国人は伝統的に親族以外の集団にそれほどたやすく献身しない。なぜなら彼は親族集団こそが取り替えることのできない第一義的意義を持っていると見ているからである。彼は同時に数個の非親族集団に参加することができる。しかしむろんいかなる集団も親族集団に取って代わることはできないから、彼に百パーセントの献身を求めることは不可能だ。これと対照的に、日本の親族集団はその重要性がかなり小さい。彼が親族集団以外の集団で失敗（例えば排斥されたり）したとき、中国人のように保護を求めることのできる親族がない。恒久的な拠り所を得るために、彼は縁有って加わることになった団体に献身することが必須となる。ところがいったんその集団への帰属に

ついて問題が起こったりすれば、とてつもない災難になる。親族集団はほとんど保護してくれないからである。日本人は比較的容易に非親族集団を形成し、しかも身近な小集団に加わると、その集団と彼の属する親族集団との間の境界が曖昧になりやすい、果ては前者が後者に取って代わることだってできる。

中国人親族集団において、自分にとっての恩人（父母・族人・親戚）に対して報恩の義務のあることが極めてはっきりしている。家族と親族集団に対する強烈な責任感は永遠に彼の上にのしかかる。彼は小さな頃からよく勉強して立派な人になり、両親の面目を施し、家族のために争って名誉を手に入れるよう教育される。これが大きな原動力となって、一生懸命努力して成功するようせき立てるのだ。上は両親のため、下は子供のため、左右は親戚朋友のために。もし彼が将来官僚になるようなことがあれば、彼はその原動力が父母と親族の励ましの鞭であったことをはっきりと心に刻むことになるだろう。「公を大として私を無くし、己に克ちて公に奉ずることで家門を辱めないようにせよ」と。だがこれとは別に、彼は家族以外の所から得た利益を親族の人たちに分け与えることがあるかもしれない。それゆえ彼は、手中にある権力を利用して、自分の親族のために利得を謀ろうとすることもあり得る。前者の場合は、彼はこれによって立派な「清官」となるであろうし、後者の場合は、これによって「貪官」となってしまうであろう。ある幹部は手中の権力を利用して賄賂を貪り、あらゆる手段を用いて我が子の進学や仕事・出国・住宅などに便宜を計り、配偶者や家族のために私利を貪り、ただ縁故に委ねるだけの「閨閥関係」等々をやらかしてしまうのだ。こうした明確に異なる二種類の行為もひとつの同じ動機から出ているようだ。つまり自分の「父老郷親」（親族集団）にいい顔をしたいということである。現在、人々がひどく憎んでいる役人の腐敗行為には、制度上の問題もあれば個人の資質の問題もあるが、確かなことはわれわれの文化の深層構造上の問題だということだ。もちろん、日本もこうしたことが全くないわけではない。しかし中国人の親族体系の構造的特徴、及びそれが個人の行為にもたらす影響力こそが、「閨閥関係」やそれと類似した人の繋がりをさらに容易に作り出しているのだ。

（二）族人集団と海外の中国人と日本人

族人集団の構造上の違いは、本土を離れて海外で生活する中国人や日本人の行動方式にも影響を与えている。本土を離れて海外に向かう中国人は、血縁資格によって構成されている族人集団とよく似たネットワークの中に我が身を置いて自分を守ろうとする。海外の華僑社会ではさまざまなタイプの「宗親会」が重要なはたらきをする。これが海外華人の社団の一大特色である。アメリカの華僑社会を例に取ってみよう。姓氏と家郷を基にする華僑集団が、華僑社会の組織としては範囲が最も広く、歴史が最も古く、しかも最も基礎のしっかりとした団体なのだ。つまり、「族人集団」は海外に暮らす華人集団の社会組織としてなお大きな役割を果たしているということだ。

華僑社会における姓氏団体の歴史はたいてい百年を越えている。いわゆる「同姓は三分の親戚」として、姓氏団体が真っ先に華人の子孫をまとめてきた。こうした姓氏団体のあるものはしゃれた名前を付けている。例えば、ニューヨークの場合、昭倫公所（譚・談・許・謝の四姓）、溯源公所（雷・鄺・方の三姓）、梁忠孝堂（梁姓、梁紅玉を記念して）、至孝篤親公所（陳・袁・胡の三姓）、伍胥山公所（伍姓、伍子胥を偲んで）、曽三省堂（曽姓、曾子を偲んで）、龍崗公所（劉・関・張・趙の四

姓、劉備・関羽・張飛・趙雲の四人の名将が龍崗の桃園で兄弟の契りを結んだことに因んで）……李氏総公所（李姓）、黄氏宗親会（黄姓）、阮氏宗公所（阮姓）、趙族宗親会（趙姓）、馬氏宗親会（馬姓）、梅氏公所などのように、ありふれた名前のもある、

姓氏団体の外に、家郷に基づく団体も華僑社会では強い力を持っている。例えば、台山寧陽会館（台山県）、新会同郷会（新会県）、福建同郷会、聯成公所（全ての非台山籍の者）、三江公所（江蘇・江西・浙江省の出身者）、中山同郷会、南順同郷会（南海県と順徳県）、番禺同郷会（番禺県）、東安公所（東莞・宝安県）、恩平同郷会、開平同郷会、広海同郷会（台山県広海地区）等、その数は数十を下らない。

華僑団体の活動は一般には商業活動に関わることはなく、専ら友誼を繋ぐためのもので、大部分は動産と不動産を持ち、決まった場所を会員の集会に使用している。日常的には昼食・夕食、マージャンなどの娯楽を提供し、また奨学金制度を設けており、定期的によその町の友好関係にある団体と合同で懇親会などを開催している。しかも会員たちは互いに提携しなくてはならない義務がある。新しくやってきた移民が、自分の属する華僑集団に助けを求めてくれば、困らないようにアドバイスしてやる。この他、会員相互で資金を出し合って商売をしたり、或いは資金を融通しあったり、それなりの規模の信用組合を組織したり、会員に貯蓄を奨励したり、会員に金銭の貸し借りを斡旋する。

家族関係は海外華人の企業経営にも影響を与えている。香港・シンガポール・台湾・アメリカなどに散在する華人企業は活力に満ちている、というべきである。これらの小企業が二〇世紀初めから旺盛な発展を遂げるにつれ、海外華人企業の奥妙さが注目を集めてきた。これら華人企業の重要な特色は結局家族主義だったのである。これを構造の上から見れば、西洋の企業のように独立した個々人を単位として契約の原則に基づいて成り立っているのと違い、また日本の企業のように多くの階層的特色を持ち、高度に協調のとれた小集団とも違い、海外の華人企業は多く家族を基礎としている。海外の華人はある種の高度な自給自足を成し遂げ、家族を中心とする経済観念を持ち、韓国人や日本人の考え方とは鮮明な対照を成している。ロサンゼルス西方学院で中国歴史を研究する教授で、中国商業史の専門家でもある陳先生は『日本人のこの種の特色は強大な安定的性質を持っており、これによって彼らは更に大きな実のある協力を実現可能にしている。ところが、中国人のは単なる家族観念に過ぎない。日本人は会社や国家に心を寄せ、血縁関係に限定されない。ところが、中国人は自分の家族しか信じない』と指摘する。家族を中心にしている企業は、時には数十億ドル規模の大企業に発展することもあるけれども―例えば王永慶の台湾プラスチック会社や包玉剛の郵船会社のように―しかし大多数の海外に散らばる華人企業は、小規模で、家族中心の企業である。例えば、台湾の人口は韓国の半分にも満たないのに、台湾にある会社の数は韓国のほぼ三倍にも達する。

海外の華人組織の典型的特徴は、家族・親戚・同姓・同郷の関係を利用して地域をまたがるネットワークを作ることを重視し、人情・関係・信用を重視することである。こうしたパターンの有利な点は、異なる文化・政治・経済の環境下に置かれても、人々はその中で自然に相互信頼と相互協力の関係を作り上げ、私的なグローバルネットワークを作り上げてしまえることである。例えば、アメリカに住む華僑はシンガポールやバンクーバーに住む親戚・知人を通じて、シンガポールやカナダにさらに有効な投資もできるし、或いはハワイの企業家は香港にいる親戚や知人を利用して工場を建て製品を生産したりできる。現在、比較的大き

な華人企業として成功するための鍵は、世界各地に散らばる親族親戚関係を利用して、私的に情報をやりとりできるネットワークを作って多角経営に乗り出すことだ。こうして家族・親戚・知人を基礎として作られた多国籍企業は、たいてい政府が作った国有の多国籍企業に比べもっと活力がある。中国で今出現している多国籍企業は、将来そうした傾向を更に強めていくだろうし、グローバル化を目指すのは中国の趨勢でもある。この点で、最大限に世界各地に張り巡らした人間関係のネットワークを利用することは、安上がりかつ有効な方法であろう。しかしこうしたモデルの不利な点として、企業管理が家族的色彩を濃厚にしてしまうことだ。つまり、正式な取締役会なしに、集団の経営権がそっくり高齢の「家長」の手に握られてしまうことだ。これでは急激な変化に対応していくのは難しい。人と人との直接的な接触を重視して関係を結び人情や信用を作っていくので、契約に基づいて事を進めるという原則をおろそかにしてしまうし、そのために組織が透明でなくなり、平等に競争する雰囲気が損なわれ、さらに契約を基礎としてより広範な人々と組織的協力関係を作り上げていく能力を欠いてしまう。

個人の立場からすれば、親族の強力なネットワークに守られているから、中国人が本土を離れて海外で現地の人と交際する場合でも、いつも比較的大きな適応力が発揮される。なぜならこうした交際をしていても、彼が主として帰属している集団との境界が曖昧になることはあり得ないからである。集団を形成する上で「場」よりも資格を重視する場合は、比較的容易に巨大な人間関係のネットワークを作り上げることができるのだ（中国人宗族組織はたいていの場合地域を越えている）。このことが、本土を離れた中国人にとって、自分が行き来するエリア内に自分と同じ資格（例えば職業や趣味など）を持った現地の人々と抵抗なく交われることを意味する。加えて、彼らの間を行き来しても中国人の主要な集団の帰属までも曖昧にすることはあり得ない。それゆえ現地の人々と交際しても、文化心理上の障害に遭遇することは日本人に比べればかなり小さい。むろん外国人と結婚していても、海外に居住していても、一般に彼らは当地の中国人や中国の親友たちと一定の繋がりや、さらには親密な関係を持ち続けることができる。たとえ彼（または彼女）が海外での長期間暮らしていたとしても、いったん故郷もしくは親族集団のもとに戻ってくれれば、熱烈な歓迎を受ける。こうした場合、彼は自文化の個性を犠牲にしてまで当地の社会の保護を求めるといった文化心理上の要請に駆り立てられることはない。時間が経っても彼の「中国人魂」は弱まることはないばかりか、若かった頃のことを懐かしむ思いや族人らの自分に対する親密ぶりや故郷の文化や風物などの理想化などのために、いっそう強まる。こうして彼らは長期にわたって文化的個性を持ち続けることができ、同化することはない。

これと対照的に日本人の場合は、血縁親族のネットワークがそれほど恒常的でも重要でもなく、しかも彼が帰属する小集団には大きな不確定性があるために、海外の日本人は中国人のように血縁親族の資格で自然と集団を作っていくことがない。日本人にとっては、たかだか皆の姓が「加藤」とか「渡辺」だということで、或いはたかだか皆が新潟県人だからということで、関係が密でしかも強力な力を持った集団を作るというのは理解を超えることなのだ。彼らは自分の生活の「場」にこだわるのであって、血縁資格で多くのグループに分かれるようなことはしたがらない。こうしたことと関係して、海外の日本人組織の典型は、なお「タテ」の特徴を備えている、すなわち組織ががっちりし凝集力の強い企業は、その触覚を日本本土から多くの国家にまで伸ばしていて、その触覚

の末端で人々は互いに結びついているので、異なる文化・政治・経済の環境の中では人同士の繋がりは比較的弱い。例えば、ソニーの社員同士だと容易に親密な関係を結ぶが、東芝とかその他の会社の海外駐在員との往来はさして多くなく、果ては互いに警戒心すら持つことがある。こうしたパターンの長所は、海外と本国との間に、より密接な連携が取れ、海外の組織はほとんど本国の組織の延長となり、本国の組織と完全に同じ経営方法が採られることにある。その成員たちの関係は、ずっと容易に、家族・同郷などを越えて会社や国家のレベルでも、より大きな協力関係を実のあるものとすることができる。しかしその短所は、文化や国家をまたいで関係のネットワークを自動的に形成する力量がないこと、企業が現地社会との融合の度合いが小さいこと、異なった企業の間での日本人の繋がりをやや欠くことなどにある。

個人の立場からすれば、日本的族人集団の構成の特色からして、日本人が外国に行き現地の人と関係を結ぶ際に、少なくとも二つの解決しなければならない問題がある。その一つは、相手と自分が階層の序列の中でそれぞれどのあたりにあるかを先ず確定したうえで、自分の言行を決定して、あの高度に協調性のある小集団を復元することだ。けれどもこれはたいていの場合極めて困難だ。第二は、なじみの薄い人との交際であまり深入りしてはならないことに注意しなければならない、さもなければ自分が所属する日本人の集団から疎まれるか、果ては見捨てられてしまう可能性もある。それゆえ、小集団を離れて、突然異文化の中にわが身を置いたとき、いつも中国人よりも強いカルチャーショックを受けることになる。日本人が「人見知りする民族」だとか「つきあい下手の民族」だとかといわれる大きな理由は、つまりここにある。海外の日本人には突出した特徴がある。すなわち日本人が親密なグループを作ると、プライベートな社会生活の大部分をそこで過ごすこととなり、現地の人との交際はやや少なくなるということだ。こうした場合、日本人は一緒にお茶を飲み、食事をし、おしゃべりをし、出社するときも一緒、残業も日本人だけが残ってする。休日もたいてい日本人同士一緒に過ごす。妻たちも近くに住む日本人主婦としか交際しない。子供たちも同様だ。つまり、日本人学校に行き、日本国内で使っているのと同じ教科書を使い、日本から来た教師が教え、放課後は一緒に送迎バスに乗って帰宅し、日本人同士で遊ぶ、などだ。現地の人がそれを「小東京」と呼んでいるのは、彼らが海外にいようとも、国内にいるのと同じように、自分を日本人からなる小集団のなかに完全に埋没させてしまっているからである。その意味では、彼らは自分の小集団を別な所に移し変えたに過ぎない。もちろん、いかなる文化的背景にある人でも、故郷を離れて言葉も風俗習慣も異なる土地に行けば、誰でも自分の同胞と親密な関係を結んでお互いに助け合おうとするものだ。中国人もこうした「かたまる」傾向は極めてはっきりしている。例えば、世界中、華人がいるところはたいていどこでもチャイナタウンやエネルギッシュな華人社団がある。しかし上に述べたように、海外の中国人の「かたまる」現象は少なくともひとつだけ日本人と違うところがある。血縁や地縁の資格が、中国人には比較的重要であるの対し、日本人には共同活動の「場」のほうがより重視されるという点だ。

海外の日本人には中国人と異なるもう一つの傾向がある。それは迅速かつ徹底的に現地の文化に同化しようとする傾向だ。外国人と結婚したり、外国に定住した日本女性は、短時間のうちに行動様式から顔の表情・化粧方法、はては髪型に至るまで現地の文化に完全に同化してしまう。前述した日本人が「かたまり」やすいという傾向とは反対に、これらの

人はほとんど日本人と交際せず、完全に現地の人との交際の中に埋没してしまう。こうしたことは、外国人と結婚した日本男性や海外に暮らす日僑にも言えることだ。表面的には、こうした情況は前述した「かたまる」という特徴と全く対照的だが、実はひとつのことが両極端になって現れたに過ぎない。先に述べたように、日本人は中国人のような親族団体の保護を欠いており、高度の協調性を持ち高度の献身を要求し、しかも比較的変化しやすい小集団の中に自分のよりどころを求める。だから、もし何らかの原因でその集団のもとを離れることになったり、排斥を受けるようなことになれば、それは大いなる失敗を意味する。流暢に外国語が話せ、長期間外国人と交際している日本人が、自分が属する集団から長い間離れたままでいると、仲間から疎遠にされたり、はては排斥されてしまう。こうした外国人と結婚して国外に定住している日本人は、当地の日本人から差別的な目で見られるだけでなく、彼が所属する集団の成員からも多くの場合冷たくされる。そのことの補いとして、彼らは自分から現地の人に向かうことになり、努力して溶け込み、受けられようとする。だがその見返りとしてたいていの場合、自分の文化的個性を犠牲にせざるを得ない。そのため彼らが迅速に現地社会に同化しようとすることは、つまり現地の社会に保護を求めることに他ならないのである。

【注】

（1）班固等『白虎通義』宗族篇参照。

（2）慕容翊『中国古今姓氏辞典』（黒竜江人民出版社　一九八五）一七三頁参照。

（3）日本人の最も単純な姓は「一」と「和」で、最も複雑な姓は一二個の漢字からなる。「藤木太郎喜佑之衛門将時能」と「籠谷懿府舎仰隷里小也弘光」がそれだ。珍しい姓としては、「八月一日」「四月一日」「十七女十四男」「数十万人」などがある。

（4）R・ベネディクト『菊と刀』（浙江人民出版社　一九八七年）四三頁参照。日本語版では六一～六二頁に相当する。

（5）中根千枝『適応の条件』（中国語版　河北人民出版社　一九八九年）二九二頁参照。（訳者注：該当部分なし。『家族の構造』からの引用か。）

（6）『蕭山管氏宗譜』巻四「祠規」参照。

（7）蘇陽「敬祖祭祖活動における村民と組織：一九九二年中国西北孔姓の山村での実地調査」（『社会学と社会調査』　一九三三・一－二期合刊）五八―七二頁参照。

（8）R・ベネディクト前掲書四四頁参照。（訳者注：日本語版では、六二～六三頁に相当する。）

（9）中根千枝『タテ社会の人間関係』（四四版　講談社　一九七六年）六一頁参照。

（10）朝日新聞　一九八七年二月五日付。

（11）同一九八七年一月一三日付。

（12）このことについての報告や論著は大変多い。中根千枝の『適応の条件』（講談社　一九七二年）稲村博の『日本人の海外不適応』（ＮＨＫブックス　一九八〇年）などを参照されたい。

（13）一九九〇年二月一六日付『光明日報』の江蘇省建湖県の平墳についての報道の参照。

（15）宋挙誠・喬潤令「家族勢力の変化及びその農村生活への影響」（『社会学と社会調査』　一九八八年三期）一七～三五頁。

（16）一九九五年一二月二一日付『光明日報』に「農村の修譜の風を助長させてはならない」との評論があった。以下に摘録しておく。

近年、農村では人々の間で資金を集めて族譜を編纂する風潮が盛んになってきており、しかもある地区ではますますそれがひどくなっている。族譜の装丁や印刷は日ごとにその精美さを増し、挿絵や写真等も多くなっている。それらは宗族内の各家族とってある種無形の圧力となって、彼らを支配し圧迫している。この現象は、農村の社会主義精神文明の建設に障碍となるばかりか、潜在的に社会の不安定要素を作り出している。

ここ数年、農村の人数のわりに多い姓氏は、族譜を編纂し終わっているか、まだの場合は少なからずその準備中であったり相談中であることが

分かってきた。この種の修譜活動は県・省・国をまたがっており、およそ自分たちの姓氏と関連がある者は一切合切書き入れてしまう。修譜をめぐって、各姓氏が互いに競い合っている。例えば、趙姓の族譜が活字印刷なら、張姓の族譜は電子印刷、孫姓の族譜は白黒なら、李姓の族譜はカラー、等々というように。各姓氏の間の「競い合って勝とうとする」ことが、族譜の印刷費用を1冊当たり200元前後にまで押し上げてしまっている。この他、族譜を出版してからも、「族長」は族譜刊行の記念式典を盛大に行う。果ては、「族戯を歌ったり」、「族宴を開く」等々のことまでする。こうした明らかに多額の費用は、族譜のための費用とはみな区別されて、各戸毎に供出させられる。このために、多くの農民は苦しくても何も言えず、ただ族内で馬鹿にされたりいじめられたりすることが心配なものだから、何とか金を掻き集めて納めるほかどうすることもできない。

こうしたますますエスカレートする「修譜の風潮」は、農民の負担を増すばかりでなく、宗族観念をひどく強固なものにし、地方末端の党組織の指導力を弱め、封建的迷信の蔓延を助長し、ついには社会の治安を脅かす芽となるだろう。例えば、ある強い姓が弱い姓をいじめたり、族内にトラブルが起きても、村や郷の幹部に解決を委ねようとせず、「族長」に解決してもらおうとする。また例えば、清明節の時などに族姓が祭族活動を大々的に行う。そのとき往々にして墳墓を巡って宗族間の紛争や武闘もおこる。そんなときに地方幹部が出ていって説得しようとしても、そんなことでは済まない。ところが「族長が号令一下すれば、直ちに収まる。」この他、修譜は「男尊女卑」の封建思想を強化する。なぜなら、族譜の規定では、女の子は書き込まれないのだ。このように、元々困難な農村部での計画出産事業が、いっそう困難になってしまう。

……農村の「修譜の風潮」が盛んなわけは、伝統が影響している他に、次のようないくつかの理由がある。一つは、「文革」期に族譜を焼かれてしまったために、ある人々は族譜の夢をずっと暖めてきたこと。二つは、社会の転換期にあること。ある人にとっては市場経済の競争に適応できず、修譜に心の拠り所を求めているのだ。三つは、「族譜」を通じて、誰が権力を握っているかその内情を知って、それでコネを使おうとすること。四つは、少数の「金持ち」が族に名を残そうと考えていること。五つは、宗族主義の亡霊が復活し封建的迷信が横行していること。この他、地方幹部が黙認したり関与したりしていることや、本族の国外で仕事をしている者や退職者らの協力なども大いに関係がある。

（17）章啓新「山間部の軍需工場の人間関係の親縁化とその対策」（『社会学と社会調査』一九八八年三期）一四～一六頁。